「エルサレム滅亡予告と人の子の到来」　2023年11月08日

「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。」（ルカ21：20）「人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる異邦人のもとへ連れて行かれる。異邦人の時が満ちるまで、エルサレムは異邦人に踏みにじられる。」（ルカ21：24）「その時、人の子が力と大いなる栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こし、頭を上げなさい。あなたがたの救いが近づいているからだ。」（ルカ21：27～28）

「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい」と書いている。ユダヤにいる人々は山に逃げ、中心部にいる人々はそこを退き、地方にいる人々はユダヤに入ってはならない、書かれていることが実現する懲罰の日だからである。それらの日に、身重の女と乳飲み子を持つ女は大きな不幸に見舞われる。エルサレムには大きな苦難があり、この民に神の怒りが下るからである。「人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる異邦人のもとへ連れて行かれる。異邦人の時が満ちるまで、エルサレムは異邦人に踏みにじられる。」包囲した軍隊によって人々は剣によって殺され、捕虜となった人は異邦人の下へ連行され、奴隷となる。そして、エルサレムは異邦人によって凌辱される。この記述は、エルサレムが紀元70年にローマの軍によって、悲惨な形で滅亡した歴史的事実を背景に書かれている。歴史家ヨセフスは『ユダヤ戦記』で、包囲したローマ軍に兵糧攻めにされ、飢えと渇きの中で地獄のような状態で、110万人が死に9万7千人が捕虜となり奴隷にされたと書いている。著者ルカは、主イエスによるエルサレム滅亡予告を、終末前の徴として書き加えている。そして、黙示的に終末時の異変と救いの出来事へと繋げている。太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂い、諸国の民は恐れおののく。天の諸力が揺り動かされ、人々は世の終わりを予感し、恐怖のあまり気を失う。天と地は揺り動かされ、荒れ狂い、人々は恐怖におののき、気絶する。「その時、人の子が力と大いなる栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」天地が激変を起こしている時、力と栄光に満ちた「人の子」が雲に乗って来るのが見える。著者ルカが説く終末時の黙示的表現である。この表現は、ダニエル書7章13節の「私は夜の幻を見ていた。見よ、人の子のような者が／天の雲に乗って来て／日の老いたる者のところに着き／その前に導かれた」から引用している。この「人の子」は全ての権能を与えられ、諸国の者たちはこの方に仕え、「人の子」の支配は永遠で、その統治は滅びることがない。「人の子」はメシアで、この方が終末時に雲に乗って来て、最後の裁きを行う。このような徴を見たら、「身を起こし、頭を上げなさい。あなたがたの救いが近づいているからだ。」雲に乗って来る人の子によって、救いが成就する。この記述をそのまま信じることはできないし、信じる必要もない。著者ルカは、終末時の徴を、絵画を見るように黙示的に描いているのである。しかし、書かれていることは福音的真実である。世の終わりにキリストは再臨され、全き救いを与えてくださる。終末時は救いの完成の時である。

人間が営む歴史は戦争、自然破壊、分断による憎しみと殺し合いの中にある。悲劇の上に悲劇を重ねるように混沌としている。しかし、神はその歴史に終わりをもたらし、神と顔と顔を合わせる救いを約束してくださっている。メシアの再臨による輝かしい終末を待ち望むから、今を忍耐し、大いなる楽観と喜びを持って生きることができるのではないか。